

# 自己肯定感にコミュニケーション能力活用学習が与える影響の考察

## —小学校における PBL を活用した授業実践を通して—

武田 昌之 高度教職開発コース

キーワード：自己肯定感，コミュニケーション能力，PBL

### 1. 問題の所在と研究の目的

筆者はこれまで、一人一人のものの見方・考え方のより確かな定着や更新（＝内面的な育ち）を願い、話し合い活動を手段として実践を重ねてきたが、話すことに抵抗を感じる児童に出会う度、話し合いの意義と教師の支援とについて考える必要を感じていた。そんな中、文部科学省主催のコミュニケーション教育推進会議審議経過報告（2011）にて、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことの無い問題について、対話をして情報共有し、自ら深く考え、深め合いつつ合意形成・課題解決する力」と定義し、育成の必要性を説いていることを知った<sup>1)</sup>。また、日本の若者の自己肯定感の低さへの指摘<sup>2)</sup>がなされているが、それは対人関係の中で育つことも見えた（吉森 2016）<sup>3)</sup>。この自己肯定感の向上が児童の主体性発揮を促し、学習における内面的育ちを引き出す土台となると判断した。そこで本研究では、協働の場面を意図的に設定し、コミュニケーション能力の発揮を促すことにより自己肯定感向上が図られるか検証することを目的とする。また、実践から、教師の支援の在り方について考察する。

### 2. 研究の方法

本研究では方法として PBL<sup>1)</sup>を活用した。コミュニケーション能力発揮の上で効果的な教育手法であり、長野県教員育成指標にも明示されているが、先行研究で小学校実践が見られなかった上、自己肯定感との関連を扱った実践も散見される程度だったことが理由である。まず、平成 30 年度に所属校の 4～6 学年児童を対象に PBL を活用した学習を構想し実践した。PBL の特色を踏まえ、①問題把握・課題設定②情報収集③発信準備④発信・まとめ⑤振り返りという 5 段階からなる単元を構想し実践した。その上でコミュニケーション能力発揮の状況をアンケート等から分析した。令和元年度には、コミュニケーション能力と自己肯定感の関連について、「自尊感情測定尺度（東京都版）」を使用し分析した。

---

#### 注

1: 「企業や、地域、教員、もしくは学生自身が設定した課題や目標に対して、学生がチームを作り協力して取り組むことを通じて、知識習得・体験学習を行う教育手法」のこと。木村亮介「PBL のプログラム設計」引用 URL: [https://www.wakayama-u.ac.jp/files/00073615/PBL\\_program\\_design.pdf](https://www.wakayama-u.ac.jp/files/00073615/PBL_program_design.pdf) 令和元年 12 月 4 日確認

### 3. 実践内容と結果および考察

#### 3.1 実践過程と活動内容

本研究では、平成30年度から令和元年度にかけ5つの実践を行った。実践1は「大規模地震発生時の最適避難ルート」をテーマにチームごとフィールドワークを行い、通学路と比較しながら最適なルートを考えた(3年社会・総合17時間)。実践2は「SNSによる10代の性被害防止」をテーマにチームごと対策を考え、保護者や警察の方等へ発表した(5・6年総合10時間)。実践3では「昔と今の暮らしやすさ」をテーマに生活道具について調査をし、話し合い、各自の考えを新聞に表し地域へ配布した(3年社会12時間)。実践4は「飲料水の味」をテーマに、味の決定要因等についてチームで調べ、市販飲料水と水道水を比較し、結果を水道局の方へ発表した(4年社会・総合15時間)。実践5は「人と自然の共生」をテーマに人と動物の体のつくりの違いを調べ、飼育員の方に発表した上で討論した(4年理科13時間)。本稿はそのうちの実践4の結果と考察について述べる。

#### 3.2 実践の結果

##### (1) 学習時のコミュニケーションについて

既に平成30年度の実践から、協働的な学びに対する児童の意識が変化し、仲間と話し合う良さを感じる割合が高まっていた。また、実践3終了後のアンケートから、学習において合意形成・課題解決へ至るための主なコミュニケーションには、単元の各段階で質的な違いがあることが見えてきた。同じ児童を対象とした実践4において調査を行ったところ、図1の結果が得られ、実践3での調査と同様、場面ごと異なるコミュニケーションが図られていることがわかった。PBLを活用した学習では、異なるテーマであっても各段階で同質のコミュニケーションが図られていた。そこから、コミュニケーション能力の発揮とは、図1のコミュニケーションの総体と捉えられた。また、小学校においても、PBLを活用することは児童の協働を促進し、積極的にコミュニケーションを図ることにつながると確認できた。

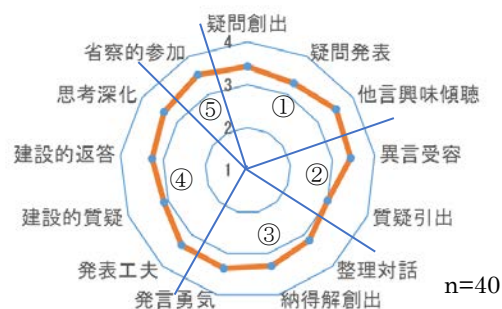


図1 実践4のコミュニケーション自己評価平均値

##### (2) 自己肯定感向上と関連要因

測定尺度を用いて調べたところ、その数値は授業後に高まっていた。また、Excel2016でt検定を実施したところ、3観点中2観点で有意差が見られた。更に、コミュニケーション能力の自己評価と自己肯定感との相関をExcel2016で調べたところ、 $r>0.71$  ( $p<.01$ )で有意に強い相関が見られた。批判的なやり取りが少なく、互いを受容し認め合える関わりが多かったことで、自己の働きに自信がもてたことや、協働的に学ぶ中で一体感が生まれ、コミュニケーションを図るほどに関係が良好になったことが背景にあると考えられた。

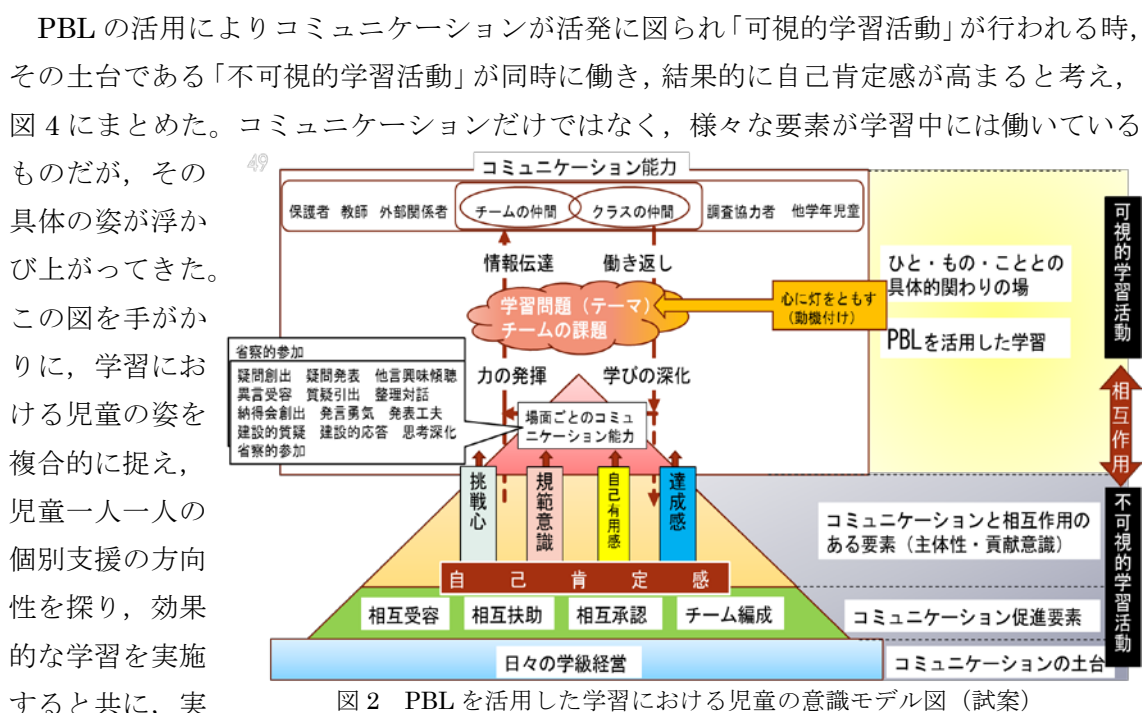
そのような温かな関係性の中、持てる力で課題を達成したことや、人から頼られたり困っている仲間を助ける声かけができたりしたことで、自分が必要とされることを感じ、更

に人と同調せず根拠をもった自己主張も行えたことが、ありのままの自己を受容する意識に繋がった。一方、コミュニケーションの量と自己肯定感の向上に関連の見られない児童が5名いた。個別インタビューから、「チームに対する貢献意識」の重要性が見えた。何らかの形でチームに貢献できたと考える子は、コミュニケーションの量に関係なく自己肯定感が向上していた。更に「挑戦心」「規範意識」「自己有用感」といった要因も働いていたことがわかった<sup>2</sup>。PBLを活用した学習においてこれらの要因が発揮されたことが、コミュニケーションとともに自己肯定感向上に影響を与えた可能性がある。

#### 4. 総合考察と今後の課題

##### 4.1 総合考察と提言

###### (1) 自己肯定感向上とコミュニケーション能力等との関連モデル図提言



践からモデル図自体の更新も行い、児童の意識をより詳細に探ることが可能となる。また、モデル図を基に評価規準を設定し提示することで、児童と教師とで目標の共有化を図ることができ、学習における児童の姿の意味づけや的確な声かけといった支援が可能になる。

###### (2) 教師の在り方～児童と向き合う・学習者中心とはどういうことか～

単元を通し意欲的に学ぶ児童の姿が多く見られた。発表資料をいかに工夫してわかりやすくするか考えた児童や、設定した自らの課題追究にこだわり、初めての相手とも電話でやり取りし情報をつかんでいく児童らがいた。A児は日頃、発言の少ない大人しい子と捉

#### 注

2: 要因を「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く児童を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(教育再生実行会議第十次提言参考資料)2017年」を参照の上、分析した。

えていたが、実は、自らの主体性発揮の場を常に模索し続け、仲間との関わりに葛藤しながらも諦めずに行動していることが見えた。自己主張しようとしてうまくいかないことに涙ぐみ、学習カードへ思いを記述しながら、それでもあきらめずにチームの仲間と関わろうとしていた。そんな真摯に学ぼうとする姿を捉えることに新鮮さと尊さを感じた。これまでの筆者が本当の意味で学習者中心の授業を行えていなかったと感じた。筆者が願う姿への到達を求めすぎ、結果や行為以前の一人一人の学びに向かう姿勢を、価値あるものとして十分認識できていなかった。多様な主体的学びの生まれる授業は、筆者の児童に対する見方や授業に対する感覚を変えつつあり、存在承認の重要性に気づかせた。

その上で、図2を踏まえ、教師の支援について考える時、環境設定と児童の心に灯をともし（動機付ける）こと、そしてファシリテーションを主な役割とし、具体的な学びは個々の主体性に委ねたり、児童とともに学んだりする筆者の姿勢が、正解のないテーマを扱う学習者中心の授業を行う上で重要であると言える。また、児童の存在承認を旨とし、筆者が願う姿の実現を第一優先にしないという意識も重要である。願いを持つ（＝ある意図をもって働きかける）ことは、知識・技能習得という結果や、思考・判断・表現の発揮という行動の評価に筆者を向かわせる。学習上の失敗経験を筆者が否定的に捉え、児童を受け身にさせもする。存在承認を行った上に結果や行動の評価へ目を向けたい。更に、筆者自らの限界の自覚も必要である。児童理解の努力は必須だが、多様な学びが生まれれば一人一人の全てを把握することは難しいという自覚が、児童が自ら動き学び合う姿を支え、認める姿勢をもつことへつながる。それは、児童への信頼感を土台に置くことである。この他、参考文献④も踏まえ、学習者中心の授業と教師主導の授業の違いについて、課題設定、学習時間の使い方、解決方法の選択、チーム編成に関する決定権の所在がポイントと感じた。これらを児童の側に保障するよう配慮した単元の構想・実践が今後の要諦である。

#### 4.2 今後の課題

今後は、年間を通し PBL を活用した学習が行えるようカリキュラムの構想と実践を行い、自己肯定感のより安定した向上が図られるか検証を行う。また、他学年での実施や、モデル図の更新も行い、教師の支援の在り方について考えていく。

#### 主な文献

- 1)コミュニケーション教育推進会議審議経過報告(2011)「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～」pp.1-28
- 2)独立行政法人国立青少年教育振興機構(2018)「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書(概要)ー日本・米国・中国・韓国の比較ー」p.13
- 3)吉森丹衣子(2016)「大学生の自己肯定感における対人関係の影響ーコミュニケーションを重視してー」『国際経営・文化研究』Vol.21, N0.1, pp.179-188
- 4)ダニエル・ピンク(2015)「モチベーション 3.0ー持続する『やる気』をいかに引き出すか」講談社, pp.161-189